

Title	G. Chapman の悲劇 : <その1> Bussy D'Ambois の問題点
Author(s)	石田, 久
Citation	Osaka Literary Review. 3 P.16-P.26
Issue Date	1965-02-01
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25835
DOI	10.18910/25835
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

G. Chapman の 悲 劇 —

〈その1〉 *Bussy D'Ambois* の問題点

石 田 久

Bussy D'Ambois は今日の読者にとっては悲劇としての緊迫感を欠き、Chapman の、脇役及び主人公自身の科白を通しての入念な persuasion にもかかわらず、我々は hero の人間性の中に偉大さを認めることに困難を感じ、従って破局に於ける hero の死に同情するいとまもないうちに劇が終ってしまうという印象を受ける。この劇を一つの作品として、Chapman という土壌から切り離して読むときには、一人の豪胆な男が、ぬかるんだ夜道を疾風のように荒れ狂って駆け過ぎていって、木の根に足をとられて転倒したにすぎぬというような気がしないでもない。しかしここでもう一度 hero の死の様子をふり返るとき、そこには同情を感じさせるものはないが、その壮大きさに改めて目を見張るのである。というよりは、hero は我々の同情を撥付け、ともすればその immortality に対する確信のために羨望をすら感じさせる。そして突然我々は、この作品の意図がこの破局に於いて「不滅性」を確信する巨人像を作り上げるという一点に存するのではないかと考えるのである。とはいえ、劇の破局直前までを通して、その言動から我々が一応知っている hero と、この、死に直面して初めて見られる「不滅」への信念の強さととの大きな距りは尚縮まらないまゝである。「これらの不連続な動きの後に実際に結末がやって来るときには、唐突にやって来て、我々にはどうしてそうなるのかわからない位である。」^①という表現の中にも、作品の plot をたどっていても、この結末に滑らかにつながってゆかないことへの批判がうかがえる。

Chapman の他の悲劇においても見られるように、この劇も、専ら題名となっている人物 Bussy を主人公として終始する。極端な言い方をす

れば、Chapmanの悲劇は「Character が全てであって、plot はなく、従ってきわめて非アリストテレス的である。」^②ということになる。この作品についても「Bussy がこの劇の全て」^③であり、他の人物との関連に於て劇が進展するのではなくて、Bussy には独自の行動の基準があり、それに従って極めて自己中心的に動いており、一方それを囲む一団の人物は、彼等相互間では緊密なつながりをもちながらも、Bussy との関連に於ては reality に乏しい。主人公が存在するのは「他の人物とは異った次元に於てであり、彼等がまきこまれている action とは別の reality を持っている」^④ということが出来る。この劇での重要な脇役は、王の弟 Monsieur, 公爵 Guise, 伯爵 Montsurry 及びその妻 Tamyra である。これらの人物については性格描写も相当詳しく、個性らしきものを与えられており、それぞれの関係に於てある程度 real である。ところが、王や僧侶などは、この劇の進行上の役割に比べると（王は宮廷の中心であり、僧侶は Bussy と Tamyra の恋愛の仲介をし、霊を呼び出して Bussy に謀略を予知させる）極端に類型的な描写で終っており「個性というよりはむしろ地位や機能によって区別される」^⑤群小人物の例となっている。

そこで、hero とそれ以外の人物の行動の基準の相違 —— 存在する次元の相違 —— を明らかにするために、hero と彼等との間の、劇の進行中に生ずる action と reaction の不均衡という点を考えることから始めよう。

Fortune, not Reason, rules the state of things,
Reward goes backwards, Honour on his head ;
Who is not poor, is monstrous ; only Need
Gives form and worth to every human seed (I. i. 1-4).

Bussy が登場するのはこの言葉でもってである。戦争がない時の軍人は、戦場に於ける軍功によって重臣となることは出来ない。ト書きに見られるようにこの時の Bussy の身なりは貧しい。それ故に虚栄・不倫・陰謀の渦巻く宮廷の中へと Bussy は入ってゆく。これは彼自身の野心によるよりも、王冠に執念を抱く王の弟が、Bussy の “A man of spirit beyond the reach of fear (I. i. 46.)” という性格を利用して自分の野心遂行の手段にしようとしたという方が妥当である。その直後の Bus-

sy の独白によって我々は彼がすでに王の弟の野心を見抜いているのを知り、同時に彼が 'virtue' でもって立身出来るのなら失墜の危険を冒しても敢て試みようとするのを見る。この時点に於て Bussy は劇中の主要人物の一人 Monsieur と、宮廷への紹介を通じて交渉をもつようになる。しかし Bussy の方ではこの紹介者に何の負い目も感じていないし、そんな事は超越しているように見える。宮廷に入った Bussy は気の向くままに廷臣達の追従や陰謀を痛烈に皮肉ったり、大胆にも、公爵夫人や伯爵夫人に court したり、更には決闘して三人の廷臣、軍人を殺害する。王はそれを許すばかりか、益々彼を重用するため、公爵 Guise の怒りはつのる。遂に王の目前で二人が決闘を始めかけるのを止めさせた後、王は Bussy に対して

kings had never borne

Such boundless empire over other men

Had all maintain'd the spirit and state of D'Ambois

(III. ii. 95-97) ;

という詠嘆的な讃辞を送る。これは Bussy の性格を表わすという意味では理解出来るが、この文脈に於て王の口から出ることには不自然である。つまりこゝでも、王は Bussy と同じ次元に立って劇の進行に参加するというよりも Bussy の持つ独自の行動基準を提出する作者の代弁者として、

Who to himself is law, no law doth need,

Offends no law, and is a king indeed (II. i. 203-4) .

という、前記の三人との決闘後の昂然たる自己弁護の再確認に終わっている。この、いわば場違いの讃辞という一事によっても見られるように王と Bussy の間に interaction の断絶が見られる。この種の断絶は Bussy と公爵 Guise との関連に於ても見られる。Bussy の突然の昇進に Guise が一方的に立腹して口論した結果、Bussy を自分の野心のために利用しようとして失敗した王の弟 Monsieur と結託して Bussy を陥れようとする時にも、この共謀者側の action に対して Bussy の方に reaction がなく、そのために、この二人の憎悪対 Bussy の関係に沿って劇が進行するとはいえない。妻の Tamyra に Bussy と密通された伯爵 Montsurry は妻の侍女からその事を聞いて、当然のことながら、狂的な

激怒を示し、Bussy を既に憎んでいる王の弟と公爵の一味に加わる。しかし一方 Bussy の方では Tamyra の夫のことなど、少なくとも露見したことが Tamyra の口から語られるまでは念頭になく、唯自分の思う通りに行動してゆく。彼の意識ではこの密通は別に不倫ではないのである。従って夫がその事を知って復讐を企てない限り、夫は問題にならないのである。罪の意識にかられる Tamyra に答えて、

Sin is a coward, madam, and insults
 But on our weakness, in his truest valour :
 And so our ignorance tames us, that we let
 His shadows fright us (III. i. 20-23) :

という言葉はそれを物語っている。密通が露見したときでさえ、Montsurry に対する対抗策を考えるより先に、その事を Montsurry に知らせた王の弟 Monsieur に対しての嘲けりとも思われる

What cold dull Northern brain, what fool but he
 Durst take into his Epimethean breast
 A box of such plagues as the danger yields
 Incurr'd in this discovery (IV. ii. 30-33) ?

という言葉は口にしている。むしろ自分の行動を邪魔する方が悪いと主張するように思える。そして Friar の呼び出した『霊』によって、三人が結託して自分を殺害しようとしていることを知りつゝもそれに対する reaction は、密通の露見を未だ知らぬふりをしていようということだけで、その計略との対決から期待される緊迫した場面は欠けている。

この断絶感を最も強く感じさせるのは、主人公 Bussy の死の直接の原因となった Tamyra との関係に於てである。Bussy と Tamyra の最初の出会いは Bussy が初めて宮廷に出て、早くもその大胆な振舞いのために他の人々の軽蔑的な言辞を浴びている時である。その場面に於て、それらとは異なった響きを持つ Tamyra のたゞ二度の極めて短かい発言

Has he never been courtier, my lord ? 及び
 The man's courtier at first sight. (I. ii. 79 & 87)

は、唐突なことにその次に舞台に現われるときは、Friar に導かれての二人の密会の場面であることを考え合わせると極めて重要であると言わねばならない。何故なら、宮廷での adultery が一般的であったことは、王

の弟 Monsieur が Tamyra を誘惑するときの “A husband and a friend all wise wives have.” (II. ii. 19) という言葉によっても十分察せられるが、少なくとも Bussy の地上での運命の上に決定的な影響を及ぼすことになる Tamyra との恋愛の導入部がこのように無造作に省略され、圧縮されていることはこの作品の意図が Bussy と Tamyra の愛の世界の描写ではないことを物語るからである、と同時にその後の二人の関係は確かに進展してゆくが、夫に対しては不貞を恐れつゝ自ら制御出来ない愛に操られている Tamyra に対して、Bussy にはそれと釣り合うだけの passion の表われが見られないことから、Bussy とその周囲の人物との関係が稀薄であることが見られる。

このように見て来ると Bussy について、Chapman の他の悲劇の主人公と同様に「自力本願的であり、環境の産物ではない」^⑥ということをも M. C. Bradbrook 女史と共に感じるわけである。Bussy は一介の貧しい軍人から一躍宮廷中で王の恩顧を受けるようになり、その中で口論、決闘、密通、そして最後に謀殺されるまで plot の中では多様に周囲と接触があるにもかかわらず、彼は常に virtuous であるとされ、天空の一点を凝視したまゝで変化しない。それ故に我々はこの作品を読み進んで行っても Bussy の中に、最後の場面で見られる magnificence が彼の内部に存在することも、またそれが彼の内に積み上げられてゆく様子も知る由がない。というのも、Bussy 謀殺の動機となったのは彼の、伯爵夫人との密通であり、そのこと自体は決して justify されるものではない。従ってそれが引き起す死も、本来崇高な性質のものではない筈である。ところがそのような motive の低劣さを飛びこえた所で Bussy は

Oh, my fame,

Live in despite of murther! Take thy wings

And haste thee where the grey ey'd Morn perfumes

Her rosy chariot with Sabsean spices (V. iv. 98-101) !

と叫んでいるのである。こうして Bussy の他の人物からの、そして plot からの、孤立は、彼の死が壮大であればある程強調されるのである。

このような主人公の遊離に反して、一方ではそれを囲む人物の間には、

我々を十分に納得させるだけの緊密な interaction がある。既に述べたように、Monsieur は王位への野心を Bussy に托し、その失敗を悟るや、Bussy の宮廷での大胆さや自分に浴びせられた毒舌に憤慨している Guise にくみし、妻に密通された Montsurry にその密通の事実をほめがしてじらせた上、半狂乱になった Montsurry に策を授けて Bussy 打倒をしとげるのである。Tamyra も、性格に一貫性を欠くことは認められるが、彼等との関係という点に関しては、その緊密度は Bussy に対してより高いといえる。つまり我々がこの四人に焦点を合わせて行動の基準を考えるとときには、そこには real な interaction が見られることに気づくのである。Monsieur が Bussy に対して抱いた恐怖と憎悪の感情から謀殺者になってゆく過程や、Tamyra に裏切られた夫 Montsurry が狂乱の果てに妻を拷問する場面などは性格描写として優れているのは Parrot が指摘する通りであり^⑦、その為にこれらの脇役に見られる関係の緊密さが主人公を一層浮き上がらせる結果になっている、これらの人物の action の motive については、王の弟 Monsieur は野心と憎悪、Guise は妬み、Tamyra は情欲、その夫 Montsurry は嫉妬というように、それぞれ明確に示されている。では Bussy を動かしているのは何かという事が次の問題になってくる。

Bussy は Monsieur から宮廷に出仕するようにとの誘いを受けたときに、

If I may bring up a new fashion,
And rise in Court for virtue, speed his plow

(I. i. 129-30) !

と言った後で、出仕の決意をしている。こゝに見られるように彼は ‘virtue’ でもってこの地上の世界に於て高い地位に昇ってゆくことが出来ると信じる。彼の奉ずる ‘virtue’ とは今日の我々の考えるものとは異なり、“the sum of all the bodily and mental excellences of man”^⑧ という Parrot の解釈、更には、悪くすれば一種の “Machiavellian virtue”^⑨ に墮しかねないという Battenhouse の指摘に見られる種類のものである。事実、彼の宮廷に於ける行動は今日の意味での ‘virtue’ では説明がつかないものである。Bussy にとっては地上の世界の諸々の道徳律や法律は取るに足らぬものであり、彼を導くべきものは自らの判断だ

けである。

since I am free,
(Offending no just law), let no law make
By any wrong it does, my life her slave

(II. i. 194-94) :

この確信は、自分の意志する所が必ず正しいという前提を彼が持っていることを示し、彼の virtue とはつまりその所信を遂行する力なのである。こゝに見られる信念が彼を動かしていることは明らかであるが、その信念が何に由来するか、また彼がどのような方向に進んでゆくつもりなのかは明らかにならない。彼の 'rise' という言葉も、宮廷に入る動機は与えても、その後の彼はその点で努力するとは見えない。彼を動かしているのは宮廷内の頹廢に対する孤独で大胆な抵抗だけであり、能動的に宮廷を肅正しようなどとは考えていない。しかしながら、この一見無方向に見える彼の行動も、この 'rise' という言葉を「宮廷に於いて」という限定を取り去って、もっと広大無辺の宇宙の階程を考える時に始めてそこに一つの方向が提示される。Bussy の凝視する世界は太陽と星の世界であり、一定不変の摂理が全てを導く世界なのである。Bussy の、

This is a grace that (on my knees redoubled),
I crave, to double this my short life's gift,
And shall your royal bounty centuple,
That I may so make good what God and Nature
Have given me for my good (II. i. 190-94) ;

に見られるように、彼は「神」と「自然」とが与えた人間の本来あるべき姿に対して確固たる信念を持っている。それ故に、Bussy に対する弔辞、

Look up and see thy spirit made a star (V. iv. 148) ;

が彼の生涯を通じて行きついた所を示すものとして壮重なひびきをもって聞こえるのである。しかしながら Bussy の魂がこのような世界を志向していることは劇のはじめ、あるいは途中から示されているわけではない。劇の進展は、前述の如く、この地上の世界に於て、そこに住む人間に焦点をしばって行われるが故に、我々の目に映ずる hero の virtue は断片的である。Bussy の『肉体』は劇の冒頭に述べられているように、Fortune に支配される世界(それは墮落した宮廷によって象徴されている)に置かれ

ており、一方彼の『魂』は、彼の virtue が連続性をもち得る世界——すなわち自らの意志に従うことが決して墮落にならない人間のみが住む世界、Ribner の言葉を借りれば *prelapsarian perfection*^⑩ が存在し得る世界にあるといえよう。

以上は、劇の中に於ける主人公とそれ以外の人物の間の interaction の稀薄さという点に注目して、この劇の中で的人物を動かす二つの異なった行動の基準ということを考え、Bussy の中に、一方ではこの地上の世界と関係を持ちながら、他方では永遠の天空の世界を目指す部分があることを考察してきた。この Bussy の姿を通じて、我々はこの劇の構造そのものの中に靈魂と肉体とは元来分離しており、別の次元に存在するという考えを見ることが出来る。Battenhouse は Tamyra の

Our bodies are but thick clouds to our souls,
Through which they cannot shine when they desire,
(III. i. 78-79) :

という言葉を用いて、この考え方がピタゴラスにまでさかのぼることが出来ると論じている。^⑪ Bussy の、死に直面した最初の瞬間の非常な驚きと憤りを伝える

Can my divine part add

No aid to th' earthly in extremity (V. iv. 80-81) ?^⑫

という言葉は、この考え方を劇の最後になって表面に出したものと考えられる。この言葉の直後に、我々が最初に問題にした、突然の上昇がやって来る。それは死によってもたらされた、彼の *divine part* の凝固であるとも言える。

I am up ;

Here like a Roman statue I will stand

Till death hath made me marble (V. iv. 96-98).

この高貴さの凝固ともいべき場面は、この劇がそれまでに Bussy の姿を通じて提示する、地上と天空という二つの次元を考慮に入れるならば、Bussy がこゝに到って地上の部分を脱却して、魂のみの姿となって天上界へ到達したさまを示すものと見る事が出来る。彼にとって死は決して Tamyra との密通に対する *punishment* ではなく、正面から堂々と昇ってゆくべき階段なのである。

そこには同時に、この“old humanity” (V. iv. 153) といわれる Bussy が、その受け入れられぬ virtue の故に、地上の移ろう世界から、不動の天界へと、つまり彼の virtue が受け入れられる世界へと立ち戻ってゆく姿が見られるのである。そこで、この移行の原因となったものは何かということを考えてみる必要がある。それは、プロットの示す限りでは、Tamyra との恋愛である。この恋愛に於て Tamyra を動かすのは

What shall weak dames do, when th' whole work of nature
Hath a strong finger in each one of us (III. i. 66-67) ?

という彼女の言葉にも見られるように、Nature の力であり、その力が Tamyra を通じて Bussy の“the earthly part” — 即ち passion に左右される部分 — に働きかけている。Nature はこの劇中に於て表面に出て来て Bussy を動かすのではないが、Tamyra を通じて Bussy を動かしていると言える。それ故に“stark blind” (V. ii. 4) といわれる Nature も、Bussy が不滅の名声の確信と、自らの殺害者に対する寛容を表明しつゝ、「地に向かって嘆くのではなく、男らしく天に向かって」死ぬ以上、彼を死に追いやることによって、消極的にはあるが、結果として一つの providence として働いていることがうかがわれる。

最初に問題にした Bussy と他の人物の interaction の欠如ということから、この劇を支える二重の判断の基準に着目した。その二つの基準のうちの、Bussy の soul を動かす基準は我々には意識され難いにもかゝらず、劇中では一貫して存在し、その存在の一貫性を確認させる脇役の科白を前後から孤立させている。そして二重の基準の両方に従っている主人公は最後まで統一像を与えられないまゝになっている。そういう主人公に Nature が一方の基準を否定した瞬間に、主人公は残された他の一方の基準の上で鮮明な映像を結ぶことになるのである。この映像が、Chapman がこの劇を通じて作り上げた Bussy 像であり、Nature によって否定される基準は、不安定で無目的な地上の社会の中で行なわれる諸行動の基準である。この一方の基準が、Chapman によって捉えられた、現実の世界での秩序の不安感を表わすとすれば、Bussy の soul を導く、Bussy にのみ認識されている整然たる order は、作者が、今は過去の栄光の記憶となった エリザベス朝 社会から持ちこんだものと考えられる。そして Bussy

D'Ambois に於て、Chapman は現実世界への抵抗を、この二重の世界観のうちの後者へ立ちもどることによって示している。この作品における主人公は、この二重の世界観が Chapman の意識内で微妙なバランスに立っている所に存在し、作者は Nature という偶然的要素の強い力を主人公の意志と無関係に働かすことによって結末を求めたものであるが、*Bussy D'Ambois* より後の悲劇では、この作品に見られる Nature という、主人公とは独立の、従ってそこにはまだ外的な力による導きを暗示する余地のある要因が、主人公自身の意志たる stoic な態度におきかえられることにより、作品に反映される作者の現実否定の様相がそれだけ強まってゆくことになると考えられる。

本稿では、劇中人物の言葉から Chapman の考えを引き出すというよりも、その中での人物の行動と人物間の関係を通して、そこに内在する二つの行動基準ということから、この作品の、chapman の最初の悲劇としての問題点をさぐるうとしたものである。

註

- ①. Edwin Muir : 'Royal man, Notes on the Tragedies of George Chapman', *Shakespeare's Contemporaries*, ed. by M. Bluestone & N. Rabkin, New Jersey, 1961, p. 233 (The article was originally published in *Essays on Literature and Society*, London, 1949)
- ②. R. W. Battenhouse : 'Chapman and the Nature of Man', *Elizabethan Drama—Modern Essays in Criticism*, ed. by R. J. Kaufmann, New York, 1961, p. 141 (The article was originally published in *ELH*, XII < June 1945 >)
- ③. T. M. Parrot (ed.) : *The Plays of George Chapman, The Tragedies*, New York, 1961, p. 545 (vol. II)
- ④. Edwin Muir : *op. cit.*, p. 231
- ⑤. U. M. Ellis-Fermor : *The Jacobean Drama*, London, 1936, p. 55
- ⑥. M. C. Bradbrook : *Themes and Convention of Elizabethan Tragedy*, London, 1935, p. 71 (paper-back edition, 1960)

- ⑦. Parrot : *op. cit.*, pp. 544-45
- ⑧. *ibid.*, p. 546
- ⑨. R. W. Battenhouse : *op. cit.*, p. 142
- ⑩. Irving Ribner : *Jacobean Tragedy — The Quest for Moral Order*, London 1962, p. 27
- ⑪. R. W. Battenhouse : *op. cit.*, pp. 136-37
- ⑫. イタリクスは筆者による。

< 付記 >

1. 作品からの引用は、他の作品を論じる際のことを考慮に入れて Parrott (ed.) *The Plays of George Chapman*, New York 1961, (Russell & Russell 版) によった。
2. 本小論は第36回日本英文学会大会で発表したものと重複する部分がある。